

聖戦論（2）

—— 近代日本の場合 ——

Overview

- 近代日本の場合——聖戦を支えたイデオロギーとその影響
- まとめ——聖戦の一般的特徴

近代日本の場合

聖戦を支えたイデオロギーとその影響

国家神道の形成

—— 神社非宗教論の成立 ——

- 神道国教化政策（1868～1871年）→挫折
- 国民教化運動：教部省、教導職の設置。三条教則（1872年）
①敬神愛国ノ旨ヲ体スベキ事、②天理人道ヲ明ニスベキ事、③
皇上下奉戴シ朝旨ヲ遵守スベキ事
- 国家神道の成立（1882年）：内務省通達により、神社は宗教で
ないとされた（**神社非宗教論**）。

大東亜共栄圏の思想

- アジアの諸民族を欧米帝国主義列強の抑圧・支配から解放し、
共存共栄の大東亜共栄圏の樹立を目指す（アジア主義）。
- 大東亜戦争（太平洋戦争）は、その目的遂行のための「聖戦」
と考えられた。

家族原理——「八紘一宇」の精神

- 地の果てまでも一つの家のように統一して支配する。君臣・父
子・兄弟など上下の関係を規律する天皇制イデオロギーを、共
栄圏内部の諸民族・諸国家にまで行き渡らせ、一大家族国家圏
を形成しようとした。
- そのために、**利他・愛他**の精神を説く。
- 欧米の利己主義・個人主義へのアンチテーゼ。ナチス・ドイツ
との類似。

政治・社会状況

- このえらみまる 近衛文麿（1891-1945）「英米本位の平和主義を排す」（1918年）
 - 英米の平和主義は、現状維持を便利とするものが唱える事なかれ主義なのであって「正義人道」とならん関係がない。
- 日本社会における「時の言葉」（特に1932年以降）
 - 「非常時」「非常時下」「非常時局」「超非常時」等。これらの言葉が、日本社会のファシズム化のための土壌を形成した。大正アモクラシーの流れに立つ人々は、非常時には平常の権力と平常の手段が必要だと訴えたが、大勢は国家主義に流れていった。

キリスト教の状況

- 国家への忠孝（愛国心）とキリスト教信仰は両立し得ると考えた。「日本的キリスト教」の形成。
- 1944年、「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」
 - 宗教団体法のもと、1941年に日本基督教団は成立（同志社の源流である組合教会も合流）。
- 1967年、日本基督教団「第二次世界大戦下における日本基督教団の責任についての告白」。全文は <http://www.kohara.ac/church/kyodan/schuldbekennntnis.html>

「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断をなすべきでありました。

しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました。

まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。

仏教の状況

- 明治維新以降、仏教教団は、幕藩体制下における国教的地位を失い、また、政府の神仏分離令や民間でなされた廃仏毀釈の運動により、その存立基盤が大きく揺らいだ。さらに、政府が黙認するようになったキリスト教の存在も仏教にとって大きな脅威として映った。
- こうした事情の中で、仏教教団は、早い段階から国家の政策に迎合し、国家の価値規範に対する仏教の意義を積極的にアピールした。昭和のファシズム期には、他の宗教同様、仏教は競うようにして戦争協力を荷担していった。

浄土真宗 本願寺派

- 1936年、法主・勝如は、明治神宮と靖国神宮に参拝（神祇不拝の放棄）。
- その後、国の圧力により「**真俗二諦**」（出世間の法と世間の法、仏法と王法の区別と関係）の修正を迫られ、「王法為本」こそが真宗の基本であるとして、聖戦必勝を門徒に求める（戦時教学）。
- 1940年、「教行信証」の不読の箇所を決定。
- 1995年、浄土真宗本願寺派・大谷光真門主「宗祖の教えに背き、仏法の名において戦争に積極的に協力していった過去の事実を、仏祖の御前に慚愧せずにはおられません」。

まとめ

聖戦の一般的特徴

戦いを善と悪の闘争と見なす

- 「より小さな悪を選び取る」といった「比例性の原則」は存在しない。善と悪との間には絶対的かつ明確な区分が存在している。したがって、敵対勢力と戦うのは、相手が何か悪い「行為」をしたからではなく、相手が悪い「存在」だからなのである。
- 存在論的な次元での善悪の峻別が聖戦論の第一の特徴である。

絶対的な目的を追求する

- 「比例性の原則」だけでなく、戦闘員と非戦闘員の「区別の原則」も、しばしば無視される。
- また、聖戦は特定の宗教の主導によってなされるだけでなく、国家が**疑似宗教的な力**（排外的な愛国心）を帯びてなされる場合もある（ナチズム、大東亜共栄圏における理想）。

世界を戦争状態として理解する

- 聖戦であれ、ジハードであれ、戦争状態が平和より望ましいと考える人々がいる。その理由の一つは、世界が戦争状態にあるという理解が、暴力行為を正当化する道徳的根拠になるからである。
- Mark Juergensmeyer は、**終末思想**を舞台装置として「演出」される戦いを「コスミック戦争」(cosmic war)と呼ぶ(M・ユルゲンスマイヤー『グローバル時代の宗教とテロリズム』)。

【参考文献】

- ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』（エイミー・ルイーゼ・ツジモト訳）光入社、2001年。
- 大西修『戦時教学と浄土真宗ファシズム下の仏教思想』社会評論社、1995年。
- 「戦時教学」研究会編『戦時教学と真宗』永田文昌堂、1988年（3巻）。
- 小岸昭『世俗宗教としてのナチズム』筑摩書房、2000年。